

奥羽における 境界と奥州藤原氏

高橋 典幸

歴史の舞台となった地域は、それぞれ個性的な場であった。さらに、社会や政治の変化に応じて、地域がもっていた個性も変容していく。そうした地域の歴史的なあり方を、奥州藤原氏をはじめとして、近年研究の著しい古代末から中世初めの東北地方を素材に概観してみたい。

1 北方交易の最前線としての北奥

奥州藤原氏登場以前の東北地方は、ちょうど北緯40度線を境として、大きく2つの地域に分けられるという(巻頭図版参照)。それは陸奥・出羽両国における郡の設置状況にみてとることができる。古代律令国家は日本列島の南北に勢力を拡張し、支配機構として国・郡の設置を進めてきたが、陸奥国では北上川上流域まで、出羽国では米代川流域までしか郡が設置されなかった。これらよりも北の地域は、中央集権的な統治システムがおよばない、蝦夷の地とされていたのである。

また人々の生活様式という点でも、北緯40度線の南北で違いがみられる。住居を例にとると、10世半ばには40度線よりも南の地域では竪穴住居から平地式住居に移行するのに対して、北の地域ではなお竪穴住居が使われ続けていた。調理の施設や道具も住居形態の違いに対応しており、平地式住居では囲炉裏や鍋が使われるようになるのに対して、竪穴住居では竈で土師器の甕を使って食物を煮炊きする生活が続けられていた^①。北緯40度線以北の地域、すなわち北奥地域では、寒冷な気候や植生が北海道南部と共通することから、狩猟・漁労や畑作が優越する北方的な色彩の強い生活が営まれていた。

このように、律令国家や「日本」という立場からみれば、北奥地域は「遅れた辺境」と位置づけられることになるが、視点をかえて、北奥のさらに北に広がる北海道をはじめとする北方世界からみると、その性格は一変する。当時の北海道には、道南・道央を中心に狩猟・漁労を主たる生業とする擦文文化の世界が展開していたが、擦文文化の人々は周辺地域と活発に交易をおこなっていた^②。その範囲は広く、北はオホーツク海沿岸から千島列島、さらにはサハリンを介して大陸にまでおよんでいたが、南の本州側の交易の窓口が北奥だったのである。

① 八木光則「奥六郡安倍氏から奥州藤原氏へ」(入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』高志書院、2002年)参照。

② 瀬川拓郎『アイヌの歴史』(講談社、2007年)、
養島栄紀「古代アイヌ文化論」(吉村武彦ほか編『陸奥と渡島』KADOKAWA、2022年)参照。

なかでも、その拠点だったのが津軽地方である。津軽地方では9世紀末から五所川原(青森県五所川原市)で須恵器がさかんに生産されるようになるが、その製品は北海道各地に運び込まれていた。また北奥では鉄製品や漆器も、擦文文化の人々との交易を目的に生産されていたと考えられている。これらと引き換えに、北海道からは鷺羽やアザラシ等の毛皮、そのほかの水産物がもたらされていた③。

擦文文化との交易は10～11世紀にかけて、さらに規模が拡大したと考えられているが、この時期の北奥に出現するのが、周囲を壕で囲った、いわゆる防御性集落である。壕そのものに軍事的な意味はないとする見解もあるが、幅・深さが数メートルにおよぶ急峻なものもあることから、外敵の侵入に備えた集落と考えられている。こうした集落の存在は、この地域が何らかの緊張状況にあったことをうかがわせるが、その要因として想定されるのが擦文文化との交易である。交易の活発化にともなう富や利権をめぐる争いが発生していたと考えられているのである④。

以上のように、北奥地域は北方交易の最前線として活況を呈していたのである。そして北海道からもたらされる鷺羽やアザラシの皮は、最上級の矢羽根の原料、あるいは高級な調度品として、京都の貴族社会でも垂涎^{すいぜん}の的であった。また現在の青森県東部から岩手県東部太平洋岸にあたる糠部^{ぬかのぶ}や久慈^{くじ}、閉伊^{へい}といわれる地域は、名馬の産地でもあった。蝦夷の地だからといって、都の貴族たちがこれらを見過ごすはずはなかった。では、彼らはどのようにしてこれらの産物を手に入れていたのだろうか。再び視点をかえて、北緯40度線より南の地域をみてみよう。

③ 鈴木琢也「平泉政権下の北方交易システムと北海道在地社会の変容」(『歴史評論』795号、2016年)参照。

④ 三浦圭介・小口雅史・斉藤利男編『北の防御性集落と激動の時代』(同成社、2006年)参照。

2 奥六郡・山北三郡と安倍氏・清原氏

第1章では北緯40度線に注目したが、荘園の分布に注目すると、実はその南にもう1本、境界線がみえてくる。東北地方では全国的にみても早くから荘園が成立していたことが知られているが、北緯39度線より北には荘園の設立はみられず、郡制が施行された地域の北限(北緯40度線)とずれがある。これはいったいどういうことなのであろうか。

話は奈良時代にさかのぼる。8世紀半ばより、律令国家は積極的に版図拡大をはかり、陸奥国府がおかれた多賀城(宮城県多賀城市)よりも北の地域に城柵の建設を進めていった。これは蝦夷の人々の大規模な反発を招き、8世紀後半から9世紀初めにかけて、30年以上にわたって戦争状況が続いた⑤。朝廷から征東大使や征夷大將軍として派遣された紀古佐美や坂上田村麻呂らは、蝦夷の族長阿弭流為らと激闘をくりかえしながら北上川を北上、ついに9世紀初めには北上川上流域に達し、803(延暦22)年には前線基地として志波城(岩手県盛岡市)を建設した。これにともなう、新たに律令国家の支配下に組み込まれた北上川上中流域には磐井・胆沢・江刺^{えさし}・和賀^{わが}・稗貫^{ひえぬき}・志波^{しわ}・岩手郡が設置されていった。

しかし、律令国家はその後、それまでの政策を大きく転換する。805(延暦24)年の徳政相論によって、平安京の造営とともに、東北地方での版図拡大は停止されたのである。郡の設置も岩手郡でとまった。

陸奥国内の統治体制にも大きな変更が加えられた。陸奥国の軍政担当機関として

⑤ 鈴木拓也『蝦夷と東北戦争』(吉川弘文館、2008年)参照。

多賀城に設置されていた鎮守府が、国府から独立して、北上川中流域の胆沢郡の胆沢城(岩手県奥州市)に移され、蝦夷の鎮撫にあたるようになる。これにともなって、北上川上中流域に設置された胆沢・江刺・和賀・稗貫・志波・岩手の6郡は鎮守府管下の特別軍管区とされた。これがいわゆる奥六郡である。

出羽国でも事情はほぼ同様であった。横手盆地に設置された山本・平鹿・雄勝の3郡は、出羽国内の最前線基地である秋田城(秋田県秋田市)管下の特別軍管区とされ、山北三郡と呼ばれるようになる。奥六郡・山北三郡は陸奥・出羽国境で接しているとともに、いずれも北緯39度から40度のあいだに位置していた。すなわち、北緯39度線は、陸奥・出羽両国においては、国府管轄地域と特別軍管区との境界線だったのである(巻頭図版参照)。

ところが、10世紀半ばには胆沢城・秋田城ともに廃絶し、軍政担当機関としての鎮守府や秋田城は形骸化してしまう。そこで、これらにかわって奥六郡や山北三郡の支配を担うようになったのが、それまで鎮守府や秋田城の現地で有力在庁官人をつとめていた安倍氏と清原氏であった。いずれも京都から陸奥国や出羽国に赴任してきた官人であったが、現地の蝦夷系豪族と婚姻関係を結ぶなどして実力を蓄えたものと考えられている^⑥。安倍氏や清原氏が「東夷の酋長」「出羽山北俘囚主」(いずれも『陸奥話記』)などと呼ばれていたのは、彼らの出自を正確に言い表したものであるのではないが、蝦夷の族長に由来する権威や実力も備えていたからこそ、彼らは鎮守府・秋田城廃絶後も奥六郡や山北三郡を実効支配することができたのである。

奥六郡や山北三郡は郡制が施行されてはいるものの、実質的には現地勢力の支配下にあったのである。その後、後述するように、奥六郡・山北三郡の支配は奥州藤原氏の手に移るが、彼らも安倍氏や清原氏と同様の性格の現地勢力であった。とすると、北緯39度線以北、すなわち奥六郡・山北三郡に荘園がみられないのは、彼らが荘園制の展開を認めなかったから、といえるのではないだろうか。これよりも南の国府管轄地域では早くから荘園が設立され、奥州藤原氏もその管理にあたっていたのとは対照的である。奥六郡・山北三郡は安倍・清原・奥州藤原氏にとって特別な領域であって、それは国府や中央政府、さらには権門貴族たちも認めざるをえなかったのである。

さらに、安倍氏や清原氏の勢力は奥六郡・山北三郡にとどまらず、北奥にもおよび、北方交易にも関与していたと考えられる。『奥州後三年記』には清原真衡が新任の陸奥守源義家を饗応する場面が描かれているが、そこでは「日ごとに上馬五十疋なん引ける。其ほか金羽、あざらし、絹布のたぐひ、数しらずもてまいれり」と記されている。「金羽、あざらし」は北海道やオホーツク海の、「乗馬五十疋」は糠部の産物であろうから、清原氏が北方交易の成果を手にしていただことは明らかである。どのような手段・方法でこれらを入手していたかについては今後さらに検討を重ねる必要があるが、これが安倍氏や清原氏の経済基盤になっていたことは間違いない。

新任国司の接待に北方交易の産物が惜しげもなく使われていることにも注目したい。この事例に象徴されるように、都の権門貴族たちは安倍氏や清原氏を通じて北方の産物を手に入れていたのである。ここに彼らにとっての安倍・清原氏の価値が

⑥ 樋口知志『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』(高志書院、2011年)参照。

あった。言い方を変えれば、安倍氏や清原氏はこのような役割を果たすことによって、奥六郡・山北三郡における特殊な地位・権限を国府や中央政府、さらには権門貴族たちに認められていたのである。

3 安倍・清原氏から奥州藤原氏へ

11世紀半ば以降、東北の歴史は大きく動きはじめる。その第一幕が前九年合戦(1051～62年)である。苦戦の末に清和源氏(河内源氏)の源頼義・義家が安倍氏を滅ぼした事件として知られるが、背景には陸奥国司と安倍氏との対立があり、源頼義には安倍氏の権限や権益を奪取しようとする意図があったと考えられている。しかし、安倍氏滅亡後、奥六郡を手に入れたのは、前九年合戦で源頼義・義家に協力した清原氏であった。戦後の論功行賞により清原武則が、現地の豪族としては異例の鎮守府将軍に抜擢されたこともあいまって、清原氏の地位や権限は飛躍的に高まった。

そして清原氏の協力を得ながら、1070(延久2)年、陸奥守源頼俊によって北奥で軍事行動が展開される。のちに頼俊が朝廷に上奏したところによれば、「衣曾別嶋荒夷」が兵をおこし、北奥の住民が騒擾をおこしたため、頼俊は清原氏とともに出兵し、「衣曾別嶋荒夷」と「閉伊七村山徒」を討ち従えたという。「閉伊」は先にも触れた岩手県東部太平洋岸地域、「衣曾別嶋」は北海道のことと考えられている。陸奥守や清原氏が北緯40度線をこえて北奥に軍事介入した事件として、この合戦は近年注目を集めている^⑦。

実はこののち北緯40度以北の北奥でも郡制が施行されることになるのだが、それはこの合戦を契機として11世紀末に進められたのか、それとも奥州藤原氏のもとで12世紀に進められたのか、論争となっているのである。現状ではいずれとも決しがたいが、1080年代に後三年合戦(1083～87年)が勃発することを考えると、本格的な北奥支配は奥州藤原氏のもとで進められたのではないだろうか^⑧。

後三年合戦は、清原氏の内紛に、再び東北における権益奪取をねらった源義家が介入した事件である。この結果、清原氏は滅亡し、また源氏も目的を達することができず、奥六郡・山北三郡は藤原清衡に受け継がれた。清衡は陸奥国に赴任してきた貴族と安倍氏の女性とのあいだに生まれ、前九年合戦後は清原氏の養子になっていた。安倍・清原の遺産を受け継ぐにはもっともふさわしい人物であった。しかし、清衡に始まる奥州藤原氏の勢力は奥六郡・山北三郡にとどまるものではなく、陸奥・出羽全体におよぶことになる。この点については今までも知られていたことではあるが、平泉の柳之御所遺跡の発掘をはじめとする近年の考古学の研究成果により、新たな事実が浮かび上がってきている。

平泉における出土品として注目されるのはカワラケと呼ばれる素焼きの土器の小皿である。轆轤ろくろを使って製作されたものと、京都風の手でこねてつくったものがあるが、平泉では手でこねたカワラケが大量に出土する。カワラケは酒宴において使い捨ての盃として使われたが、当時の酒宴は政治的な関係や同意を確認する政治的な儀礼であった。奥州藤原氏のもとではこうした儀礼がくりかえされていたので

⑦ 入間田宣夫「延久二年北奥合戦と諸郡の建置」(同『北日本中世社会史論』吉川弘文館、2005年。初出は1997年)、前掲注⑥樋口著書等参照。

⑧ 小川弘和「西の境界からみた奥羽と平泉政権」(入間田宣夫編『兵たちの時代Ⅰ 兵たちの登場』高志書院、2010年)参照。

ある。また平泉では東海地方の常滑焼の壺や中国から輸入された白磁の壺の出土も特徴的である。これらも酒宴儀礼の場で酒器として用いられたと考えられている。手づくねのカワラケ・常滑焼の壺・白磁の壺は、平泉および奥州藤原氏を特徴づける遺物として「平泉セット」と呼ばれているが、これが東北の各地で発見されているのである。このことは、酒宴儀礼を通じて、奥州藤原氏が東北各地の勢力と政治的関係を取り結んでいたことを示している⑨。

なお、「平泉セット」の出土地域をみると、当時の幹線道路^{おくだいどう}奥大道に沿っていることがわかる。藤原清衡は奥六郡を継承した当初、津軽外浜から白河関に至る奥大道を整備し、その中間点に拠点平泉を定めたとされているが(『吾妻鏡』文治5年9月17日条)、奥州藤原氏が奥大道に沿って東北支配を進めたことが、考古学の成果によっても確認されたのである(巻頭図版参照)。

また奥大道の北のターミナルが津軽外浜であったこと、ここでも「平泉セット」が出土することも興味深い。第1章でみたように、津軽は北方交易の拠点だったから、奥州藤原氏も北方交易の場をおさえていたことが読み取れよう。第2章で指摘した防御性集落も11世紀末には消滅しており、奥州藤原氏の北奥支配の進展や北方交易との関係が注目される。

奥州藤原氏と北方交易については、近年、北海道^{ゆうふつ}勇払郡^{あつま}厚真町^{うりゅう}の宇隆Ⅰ遺跡で12世紀半ばの常滑焼の壺の出土が確認されたことも注目されている。北海道で唯一の常滑焼の出土であり、また常滑焼が奥州藤原氏を特徴づける遺物であることから、奥州藤原氏の関係者が持ち込んだものと考えられており、これまで想定されていた以上に深く、奥州藤原氏の影響が北海道におよんでいた可能性が指摘されている⑩。

なお、糠部地方には郡制も施行されず、「平泉セット」も出土しないが、むしろこれは奥州藤原氏の直轄支配がおこなわれていたことを示しているという。馬の産地であったこの地方には、馬牧を分割統治するため四門九戸という特別の行政区画が導入されていた⑪。

平泉の位置にも注意が必要である。清衡は康和年間(1099～1104年)に江刺郡の豊田館から平泉に本拠を移したといわれているが、それは胆沢郡と国府管轄地域内磐井郡とを隔てる衣川の南に位置していた。すなわち、清衡は奥六郡の領域をこえて、国府管轄地域内に拠点を定めたのである(巻頭図版参照)。ごくわずかな距離ではあるけれども、安倍・清原氏以来の奥六郡との関係や、国府管轄地と奥六郡の境界としての衣川の意味を考えれば、ここに清衡の大きな決意をみてとることができよう。

これまでみてきたように、東北地方にはいくつかの境界が存在し、それぞれの地域を特徴づけていた。また、そうした境界地帯からは、安倍氏や清原氏といった政治権力が生み出されてきた。奥州藤原氏は安倍・清原氏の遺産を受け継ぎながらも、そうした境界をまたいで東北全体を支配するようになった。その結果、12世紀の東北では、とくに北奥と奥六郡との地域差が解消され、地域としての一体化が進んだといわれる⑫。地域の変容・形成という観点から、奥州藤原氏が果たした役割が見直されるところである。

(たかはし・のりゆき／東京大学大学院人文社会系研究科教授)

⑨ 八重樫忠郎「平泉藤原氏の支配領域」(入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』高志書院、2002年)参照。

⑩ 柳原敏昭「アイヌ文化成立期の北海道と平泉・鎌倉」(『歴史と地理 日本史の研究』258号、2017年)参照。

⑪ 入間田宣夫「糠部の駿馬」(前掲注⑦入間田著書。初出は1986年)参照。

⑫ 大石直正「十二世紀の奥羽における地域の形成と交通」(同『奥州藤原氏の時代』吉川弘文館、2001年。初出は1993年)、前掲注①八木論文参照。